

目的　我が国の急激な高齢化に対応する手段のひとつとして衣生活の向上が挙げられる。そこで高齢者の衣生活を把握することを目的に、高齢者の衣生活に対する意識及び加齢に伴う着脱機能の状態を考察した。

方法　高齢者に対する福祉活動が盛んな東京都東大和市、立川市及び、埼玉県所沢市のおよそ3地域の寝たきりなどの障害を持たない男女高齢者123名を対象に、主に上衣既製服に関する意識調査を行い、さらにボタン、ファスナー、マジックテープの付いた3種類の上衣の着脱時間を測定した。同様の方法で10代後半からの若齢者についても着脱時間の測定を行い比較検討した。また実験の結果、高齢者においては着脱動作機能と体型との関係がみられたので体型別の意識調査及び着脱実験を行った。

結果　高齢被験者の約半数が既製服の現状に満足しておらず、男性はサイズや価格といった実用性を、女性はデザインなどのファッション性を求めている。前幅、後ろ幅、肩幅、袖丈は寸法直しで解消しつつあるものの、男性は襟ぐり、裾回り、袖口を、女性は袖幅を不快に感じている。着脱実験はボタン付き上衣の着脱時間に大きな男女差が生じ、男女共年齢と時間にほぼ正の相関を得たのに対して、若齢者男女の相関は多様な結果であった。体型別では標準体型は頸部、屈身体型は腕部が着心地の悪さとしての不適合部位として挙げられ、着脱実験については、屈身体型が全ての留め具に時間を要し体型の変化が衣生活に大きな影響を及ぼしていることが明らかとなった。